



日々新聞

第拾三号

信代
白雲

影福刀



泉岳佐野市場村ふるす本屋との宿屋
堀縣下の小商人松兵衛ハ明治八年三月中旬
一泊せしに下女あるお梅の容非なるふ
を煩悩の念をてつて官屋の
まのあたや同伴の紐のつけ
ききやまや甲掛のそといも
らるる末礼の扱ておきて
汚るる袖の縁間さすた宿の
主人の泊るるれはも梅の替を松兵衛の
つてまてて一足をもるふお梅の
ちのひらるるを合宿の長兵衛とたるとやわわの
旅栞道の旁まお松兵衛もよく熟睡の折をまて
長兵衛に計りしその替を我うちてまてか待間うそ
お梅の豆音

聞ふことごとくお梅の語ひ入声のよと松兵衛目覚し曾の
約束のくどくお梅の味をたふふ初てこの的ちん
矢作ゆあつても梅の罵り泉岳のいさかきとまり一夜流の
水掛論実事環説笑絶を
お梅の豆音

